

芥川だより

発行日*2020年5月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集 川口 伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



娘が「台湾に住みたいわ」と言う

コロナ対策で最も優れている国は台湾である。蔡英文総統や天才と言われる唐鳳 IT 担当大臣の素早い対応能力は素晴らしい。一方、欧米各国の対応の悪さが目につく。特にアメリカ・ニューヨークはひどい。これは一体どういう事なのか？怖いものなしの王者アメリカがどうして出来ないのか。コロナウイルスの狙いはニューヨーク破壊なのだろうか？

利益を最大にするために世界中の安い労働力を求めてグローバル化してきた企業の集まる最たる都市がニューヨークだ。人の命より金儲けが優先される考えである。巨大なグローバル企業の多くが国際金融都市・ウォール街で石油や株式など多くの金融取引をしている。まだ、進行中のコロナだが、これほど早く世界の国々に感染拡大したのはグローバル化による人やモノが飛び回っているからだ。コロナですぐに経営が立ちいかなくなったのは航空会社である事からでも分かる。

1円でも安ければ生産者のことも考えず飛びつく消費者、近くの農家が作るものより安くて見栄えの良い商品に群がる人。目先の損得だけに心奪われ未来に対し配慮を失った人。大企業の金儲けに供給するマスコミと政治家。意外にも、コロナは多くの事を教えようとしているのではないか。今後、グローバル化は衰え地域循環型経済が見直されるのでは。少しばかり値段が高くても地域の暮らしを守り維持していく為に買うのが当たり前の生活。大企業に頼らない、働いた儲けを本店がある大都市や金融都市・ニューヨークに持っていかれないために。

国の強さとは何なのか、国難になった時のリーダーの判断力・決断力が優れていると被害は抑えられる。逆に遅いと被害が広がる。トランプの様子伺いに明け暮れる安倍さんに危機管理の能力のなさを見た。我々も意識を変えねばなるまい。まずは選挙だ、投票率80%を目指そう。文句を言う前に投票する。それにしても、世間では無視されている、れいわ新選組の真水100兆円は現実味があると私は思う。今こそ現金バラマキ作戦の時だ。

死をめぐるあれやこれ(66)

火事場泥棒の政府をもつ我ら

石川 吾郎

布マスク二枚でさえよごれ・不潔という不具合があり、まだほとんどの国民には届いていない。さすがの安倍政権も国民の大きな声に押されて一律十万円の支給を決定した。しかしこれもいつになるか、まだ見当がつかない。これほどの無能さをさらけ出してしまった安倍政権。それでもわが国民からの非難の声は、NHKの政権援護の効果なのか、さほど大きくはなっていないように見える。だが一律十万円の支援だけでは、あまりに少ない。生活保障のためには、毎月十万円でも多すぎることはない。先進諸外国に比較して、国民支援の政府の財政支出は一桁低い。百兆円規模が相当だ。一律給付が不公平との議論には、富裕層にはのちに所得税の一部として徴収すればよい。とにかくすばやい対応が必要なのだ。もつと声を上げよう。地元の議員事務所へ電話で訴えるのも有効という。◆そしてコロナの後には、必ずデフレと恐慌がやってくる。その対策としても政府の百兆円規模の財政支出は正解なのだ。日本はそれができる状況にあり、しないのはただ政権が国民を救うという政治決断をしないというだけ、なのだ。

◆実際、この間のドタバタを見ると、こんな国家存亡の危機に、政権中枢はアベ友に利権を与えるのに汲々としている。そして、緊急事態条項を憲法に書き込むとか、政権を捕らえる心配のない人物を検事総長にするための(続く)

検察庁法改悪法案、それに種痘法改悪法案と国家戦略特区改悪法案であるスーパーステージ法案など、が国会に提出されている。これこそ三月号に書いたシヨックドクトリン、まさに火事場泥棒そのものである。



芥川だより一六〇号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 74	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 24	祖蔵哲	4
大人の今昔物語 67	石川吾郎	7
オクラの山たより 44	因丁生	8
隠された歴史 19	満田正賢	11
道をゆく 13	成瀬和之	14
編集後記	S K 生	15
ふみの道草 23	山椒魚	16
俳句	土田裕 影山武司	16

素老人☆よもだ帳 (74)

坂本一光

◆ 新型のウイルスを敵に

感染の防止を戦に例え胸張る

新型コロナウイルス肺炎の感染拡大が止まらない。この間、ウイルスを見えない敵に例え、感染防止を戦争に例える政治の指導者が世界のあちこちにいた。その言いが当然であると錯覚させられそうな状況下、ドイツのメルケル首相のドイツ国民に向けた演説の真つ当さが光った。

戦に例えた指導者の国で、とりわけ日本で、戦争状態と言ったことに見合う、国民の命を守る措置が取られたかどうかは、今は問わない。東西ドイツの統一後に政治家になるまで、東ドイツで生活していた(科学アカデミーの物理学者であったと言う)メルケル首相の声に耳を傾けたいと思う。「真摯に」という誠実な言葉の、また「寄り添う」というあたたかい言葉の意味にあらためて気づかされる演説である。

なお、この演説は二〇二〇年三月十八日に行われたもので、引用はドイツ在住の林フーゼル美佳子氏の「試訳」による。

(<https://www.mikako-deutschservice.com/about>)

親愛なるドイツにお住いの皆様

コロナウイルスは現在わが国の生活を劇的に変化させています。私たちが考える日常や公的生活、社会的な付き合い――こ

うしたのすべてがかつてないほど試されています。

何百万人という方々が出勤できず、子どもたちは学校あるいはまた保育所に行けず、劇場や映画館やお店は閉まっています。そして何よりも困難なことはおそらく、いつもなら当たり前の触れ合いがなくなっているということでしょう。もちろんこのような状況で私たちはみな、これからどうなるのか疑問や心配事といっぱいです。私は今日このような通常とは違った(「演説という」)方法で皆様に話しかけています。

それは、この状況で連邦首相としての私を、そして連邦政府の同僚たちを何が導いているのかを皆様にお伝えしたいからです。開かれた民主主義に必要なことは、私たちが政治的決断を透明にし、説明すること、私たちの行動の根拠をできる限り示して、それを伝達することで、理解を得られるようにすることです。

もし、ドイツにお住まいの皆さんがこの課題を自分の課題として理解すれば、私たちはこれ乗り越えられると固く信じています。このため次のことを言わせてください。

事態は深刻です。

あなたも真剣に考えてください。

東西ドイツ統一以来、いいえ、第二次世界大戦以来、これほど市民による一致団結した行動が重要になるような事態がわが

国に降りかかってきたことはありませんでした。

私はここで、現在のエビデミック(伝染病)の状況、連邦政府および各省庁がわが国のすべての人を守り、経済的、社会的、文化的な損害を押しやるための様々な措置を説明したいと思います。しかし、私は、あなたがた一人一人が必要とされている理由と、一人一人がどのような貢献をできるかについてもお伝えしたいと思います。

エビデミックについてはですが、私がここで言うことはすべて、連邦政府とロバート・コッホ研究所の専門家やその他の学者およびウイルス学者との継続審議から得られた所見です。世界中で懸命に研究が進められてはいますが、コロナウイルスに対する治療法もワクチンもまだありません。

この状況が続く限り、唯一できることは、ウイルスの拡散スピードを緩和し、数か月間にわたって引き延ばすことで時間を稼ぐことです。これが私たちのすべての行動の指針です。それは、研究者がクスリとワクチンを開発するための時間です。また、発症した人ができる限りベストな条件で治療を受けられるようにするための時間でもあります。

ドイツは素晴らしい医療システムを持っています。もしかしたら世界最高のシステムのひとつかもしれません。そのことが私たちに希望を与えています。

しかし、わが国の病院も、コロナ感染の症状がひどい患者が短期間に多数入院してきたとしたら、完全に許容量を超えて（医療崩壊して）しまうことでしょう。

これは統計の抽象的な数字だけの話ではありません。お父さんであり、おじいさんであり、お母さんであり、おばあさんであり、パートナーであり、要するに生きた人たちの話です。そして私たちは、どの命も、どの人も重要とする共同体です。

私は、この機会にまず、医師として、または介護サービスやその他の機能でわが国の病院を始めとする医療施設で働いているすべての方々に言葉を贈りたいと思います。

あなた方は、私たちのためにこの戦いの最前線に立っています。あなた方は最初に病人を、そして、感染の経過が場合によってどれだけ重篤なものかを目の当たりにしています。

そして毎日改めて仕事に向かい、人のために尽くしています。あなた方の仕事は偉大です。そのことに私は心から感謝します。

今、重要なのは、ドイツ国内のウイルスの拡散スピードを緩やかにすることです。そして、その際、これが重要ですが、一つのことに賭けなければなりません。それは、公的生活を可能な限り制限することです。もちろん理性と判断力を持つてです。国は引き続き機能し、もちろん供給も引き続き確保されることになるからです。私たちは

できる限り多くの経済活動を維持するつもりです。

しかし、人を危険にさらす可能性のあるものすべて、個人を、また共同体を脅かす可能性のあるものすべてを、今、減らす必要があります。人から人への感染リスクを可能な限り抑える必要があるのです。

今でもすでに制限が劇的であることは承知しています。イベント、見本市、コンサートは中止、とりあえず学校も大学も保育所も閉鎖され、遊び場での遊びも禁止です。

連邦政府と各州が合意した閉鎖措置が、私たちの生活に、そして民主主義的な自己認識にどれだけ厳しく介入するか、私は承知しています。

わが連邦共和国ではこうした制限はいまだかつてありませんでした。

私は保証します。旅行および移動の自由が苦勞して勝ち取った権利であることを、実感している私のようなものにとっては、このような制限は絶対的に必要な場合のみ正当化されるものです。そうしたことは民主主義社会において決して軽々しく、一時的であつても決められるべきではありません。しかし、それは今、命を救うために不可欠なのです。

このため、国境検査の厳格化と重要な隣国数か国への入国制限令が今週初めから発効しています。

経済全体にとって、大企業も中小企業も、商店やレストラン、フリーランサーにとつても同様に、今は非常に困難な状況です。今後何週間かは、いつそう困難になるでしょう。

私は皆様に約束します。連邦政府は、経済的影響を緩和し、特に雇用を守るために可能なことをすべて行います。

わが国の経営者も被雇用者もこの難しい試練を乗り越えられるよう、連邦政府は、必要なものをすべて投入する能力があり、またそれを実行に移す予定です。

また、皆様は、食料品供給が常時確保されること、たとえ一日棚が空になったとしても補充されるということを通じて安心してくだされい。

スーパーに行くすべての方にお伝えしたいのですが、備蓄は意味がありません。ちなみにそれはいつでも意味のあるものでした。けれども限度をわきまえてください。何かがもう二度と入手できないかのようない占めは無意味ですし、つまるところ完全に連帯意識に欠けた行動です。

ここで、普段滅多に感謝されることのない方たちにもお礼を言わせてください。

このような状況下で日々スーパーのレジに座っている方、商品棚を補充している方は、現在ある中でも最も困難な仕事のひとつを担っています。同じ国に住む皆様のために尽力し、言葉通りの意味でお店の営業を維持して下さりありがとうございます。

さて、今日、私にとって最も緊急性の高いものについて申し上げます。

私たちがウイルスの速すぎる拡散を阻止する効果的な手段を投入しなければ、あらゆる国の施策が無駄になってしまうでしょう。

その手段とは、私たち自身です。私たちの誰もが同じようにウイルスにかかる可能性があるように、今、誰もが皆協力する必要があるのです。

まず第一の協力は、今日何が重要なのかについて真剣に考えることです。パニックに陥らず、しかし、自分にはあまり関係がないなどと一瞬たりとも考えないことです。

不要な人など誰もいません。私たち全員の方が必要なのです。

私たちがどれだけ脆弱であるか、どれだけ他の人の思いやりのある行動に依存しているか、それをエビデミックは私たちに教えます。また、それはつまり、どれだけ私たちが力を合わせて行動することで自分たち自身を守り、お互いに力づけることができるかということでもあります。

一人一人の行動が大切なのです。私たちは、ウイルスの拡散をただ受け入れるしかない運命であるわけではありません。私たちに対抗策があります。つまり、思いやりからお互いに距離を取るということです。

ウイルス学者の助言は明確です。握手はもうしない、頻繁によく手を洗う、最低でも1.5メートル人との距離を取る、特にお

年寄りには感染の危険性が高いのでほとんど接触しないのがベスト、ということですが。こうした要求がどれだけ難しいことであるか、私は承知しています。緊急事態の時こそお互いに近くにいたいと思うものです。私たちは、好意というものを身体的な近さやスキンシップとして理解しています。けれども、残念ながら現在は、その逆が正しいのです。これはみんなが本当に理解しなければなりません。今は、距離だけが思いやりの表現なのです。

よかれと思つてする訪問や、不必要な旅行、こうしたことすべてが感染拡大を意味することがあるため、現在は本当に控えるべきです。専門家がこう言うのには理由があります。おじいちゃんおばあちゃんと孫は今一緒にいてはいけない、と。不必要な接触を避けることで、病院で日々増え続ける感染者の世話をしているすべての方々の助けになるになります。こうして命を救うのです。

多くの人にとってこれはきついことでしょう。誰一人孤立させないこと、声かけと希望が必要な方たちの世話をすることも重要になってきます。私たちは家族として、また社会として別の相互扶助の形を見つけるでしょう。

今でもすでに、ウイルスとその社会的影響に対抗する創造的な形態が出てきています。今でもすでに、おじいちゃんおばあちゃんがさみしくないようにポッドキャストをするお孫さんたちがいます。

私たちは皆、好意と友情を示す別の方法を見つけなければなりません。スカイプや電話、イーメール、あるいはまた手紙を書くなど。郵便はまだ配達されているのですから。

自分で買い物に行けないお年寄りのための近所の助け合いの素晴らしい例も今話題になっています。まだまだ多くの可能性があると私は確信しています。私たちがお互いに一人にさせないことを社会として示すことになるでしょう。

皆様にお願ひします。今後有効となる規則を遵守してください。私たちは政府として、何が修正できるか、また、何がまだ必要なかを常に新たに審議します。

状況は刻々と変わりますし、私たちはその中で学習能力を維持し、いつでも考え直し、他の手段で対応できるようにします。そうなればそれも説明します。このため、皆様にお願ひします。噂を信じないでください。公的機関による発表のみを信じてください。発表内容は多くの言語にも翻訳されます。

私たちは民主主義社会です。私たちは強制ではなく、知識の共有と協力によって生きています。これは歴史的な課題であり、力を合わせることでしか乗り越えられません。

私たちがこの危機を乗り越えられるということには、私はまったく疑いを持っていません。けれども、犠牲者が何人出るのか。どれだけ多くの愛する人たちを亡くす

ことになるのか。それは大部分私たち自身にかかっています。私たちは今、一致団結して対処できます。現在の制限を受け止め、お互いに協力し合うことができます。

この状況は深刻であり、まだ見通しが立っていません。それはつまり、一人一人がどれだけきちんと規則を守って実行に移すかということにも事態が左右されるということなのです。

たとえ今まで一度もこのようなことを経験したことがなくても、私たちは、思いやりを持って理性的に行動し、それによって命を救うことを示さなければなりません。それは、一人一人例外なく、つまり私たち全員にかかっているのです。

皆様、ご自愛ください、そして愛する人々たちを守ってください。ありがとうございます。

(かたちは心であり、心はかたちになる) ■
大分の素老人

哲学爺いの時事放談 (24)

祖蔵 哲

いやはやこの禍がここまで続くとは最初は思わなかった。おもえば、2020年すなわち21世紀の20年代は不吉な事件の連続で始まった。まず、日産自動

車元会長のカルロス・ゴーン被告が日本を極秘に出国し、中東レバノンに入った突然のニュースで年が明け、続いて3日アメリカがイラン革命防衛隊の司令官を殺害、その後イランがウクライナの民間旅客機を誤射とは言いながらミサイル追撃するなど中東地域の緊張は一気に高まった。そして16日オーストラリアでは森林大火災が発生し自然の猛威が吹き荒れていた。その日は同時に日本で最初の新型コロナウイルスの感染者が確認されたのである。しかし、いまだこの時点でもまだことの重大さは認識されてなかった。一体、いつ (when)、どこ (where)、何が (what)、どのように起つて (how)、人間に対して (who) それがどうなるのか (why)。全て不明瞭であった。我々はいまだ禍の渦中であるがここでこれまでの「いつ」を時系列に整理してみよう。真実に迫るためには事実の把握が必要である。

(1) 事実問題 何が起つたのか

2019年

11/17 湖北省出身の 55 歳の男が新型コロナウイルスの最初の症例

12/30 最初に発見した武漢医師李文亮がネット投稿

12/31、中国 WHOへ、湖北省武漢市「原因不明の」肺炎のクラスター発生報告

2020年1月

1/16 日本で初の感染確認

1/21 中国春節開始

1/23 武漢の閉鎖始まる

1/28 日本国内で初の感染

1/29 日本：武漢よりのチャーター便帰
国開始

1/31 WHO 世界規模の公衆衛生緊急
事態の宣言

米国：中国滞在者の入国拒否

2月

2/2 WHO「インフォデミック」警告

2/5

ダイヤモンド・プリンセス号で
集団感染が判明

2/11 WHO 病名を「COVID-19」とする

2/24 日本：専門家会議が緊急会見

2/27 日本：全国休校を要請

3月

3/5 日本：中国韓国からの入国制
限強化

3/6 米国国務長官と中国報道官で
「武漢コロナウイルス」発言の
応酬

3/8 イタリア北部封鎖

3/11 WHO パンデミック宣言

3/14 日本： 特措法施行

3/20 (金) 聖火日本到着

3/22 イタリア死者数 中国を超え
る

3/23 日本：新型コロナウィルス感
染症対策推進室が発足

3/24 五輪 延期決定

4月

4/1 日本：専門家会議記者会見

4/3 世界の感染者100万人を超え
る

4/7 日本：緊急事態宣言

4/8 武漢封鎖解除

4/14 トランプ大統領 WHO への資金
拠出停止するよう政権に指示

4/15 世界感染者200万人超える

4/18 国内感染者1万人

4/23 世界死者18万人

4/30 日本：給付金 予算成立

5月

5/2 日本：死者500人超える

5/4 日本：緊急事態宣言延長
「新しい生活様式」公表

(2) 今、何が問われているのか

① 自然とウイルス、人間その「共存」
まず、新型コロナウィルスという

「未知」のもの自体は「それ何か」とい
うことである。しかし、広くとらえれば、

それは「自然と人間」の関係になる。「そ
れ」はウイルスであるが自然の中の「存
在」、「もの」である。しかし、それは生
物か「生命」があるものなのか、まだ確
実には何もわかっていない。我々、人間
の存在が自然の中で以下にあるべきなの
かは、環境問題、生物体系、自然破壊と
同じレベルで考えて行かねばならない。

同時に現在までのそれらの対応の教訓が

示すものは「共存」であり「維持」であ
った。自然の一部である、我々人間もウ
イルスも共に生き続けることが自然の撰
理になる。

② 人類の生存戦術

「共存」とはいつても、互いに生命を
かけた戦いは「自然状態の闘争」になる。
生存目的の異なる自然物でのこの闘争は
お互いの適正な生存圏が安定するまでこ
の戦いは続く。我々人間は知性でもって、
相手の生存戦略を知ろうとする。見えな
い相手がどこにどれだけのいるのか、検査
などによるデータ分析である。それらに
よって拡散を防ぎ、お互いのゆるやかな
生存圏の確率を目指す。これは人間の理
性による生存戦術である。しかし、人間
はずでにこの世界において、自然を制覇
しつつあると思いがっている。これも
人間の知性と理性による自然科学の成果
である。だが、この奢りは今や至るこ
ろで反撃にあっている。地球温暖化、自
然破壊など影響である。そして、現代の
グローバル社会は、自然状態であればウ
イルスの伝播、拡散のスピードは人類に
対して「共存」準備する時間を与えてい
たはずであるが、それを奪ってしまった
いる。それによって、現代人はせつかく
獲得した「自由」を制限し、それに耐え
ているのである。

① 経済く問われる生存権

「コロナショック」と呼ばれている経
済の影響はかなり大きい。マルクス経済
学は資本主義経済にとって恐慌は必然だ
という。それは自由主義経済制度に内在
する需給バランスの崩れから起こるとし
ている。最初の世界大恐慌は1930年
代にアメリカで起きた。それは「ブラッ
クチューズデイ」と呼ばれ株価の大暴落
から始まった。第一次世界大戦後のバブ
ル景気の反動で起きたとされるが、世界
中に影響を及ぼしドイツのナチス政権誕
生を許し、日本も軍国主義傾向を強め第
二次世界大戦の引き金も作った。勿論、
現代でもその影響は大きい。しかし、過
去の世界恐慌と同じく、経済後退が問題
をもたらしたのではない。もともと存在
していた問題を大きくするのである。そ
れらは、世界規模での先進国と発展途上
国という「国際格差」や国内での「経済
格差」であり、「不平等」の問題である。
さらには強制による経済活動の停止に
よる経済的「生存権」の影響は休業補償
問題、生活保証問題となりこれも従来か
らの議論である「ベイシック・インカム」
などの既存の議論を呼び起こしている。

② 政治く民主主義の危機

米国が確たる根拠なくウィルスを中国
の生物兵器と断定し、国連S/Pを避難
している。従来路線の自国中心主義のプ
ロパガンダに利用して、国際協調体制に

分断をもたらしている。これも、従来からの問題点「ポピュリズム政治」の延長である。そして、「非常事態宣言」や「ロックダウン」という「自由の制限」を権力が議会の承認なしに戦時中の法律を持ち出して強行に行使している。一党独裁の国家主義国であれば当然かもしれないが、民主主義を標榜している国々がいとも簡単に「自由の制限」を受けている。

以前にも述べたが、もつとも好戦的な政治体制は民主主義国家であるという逆説はこの時期にでも証明された。少数が権力を握る全体主義よりも暴走しやすいのは多数が権力に参加するポピュリズム民主主義であることを忘れてはならない。そして古代ギリシャの都市国家アテネはこのような経緯を辿り崩壊した。

③ 社会日常生活 ー 既存問題のあぶり出し

これらも全て従来からあった問題が浮き彫りになり、そしてその問題が急速に悪化するのである。

「自己責任」という社会責任免罪思想により「差別」や「いじめ」は拡大され、そして「精神疲労」は進む。従来からの脆弱な社会保証体制は「介護崩壊」によって家族崩壊をもたらす。また、「情報化社会」における過多でフェイクなデータはデマやガセが拡散し「インフォデミック」というパニックを引き起こす。これらは平気でデータ改ざんを行っている権

力も一翼を加担している。そして、感染拡散データ収集のためという「個人データ」の国家把握は個人情報保護の垣根を平気で越えさせている。また、「教育格差」は学校閉鎖という教育を受ける権利を奪われている今さらに拡大している。また、最近示された「新しい生活様式」というものは、「戦時国策スローガン」に等しい。これこそ権力が個人の生活に関与する侵害ではないだろうか。

「生活の質」そのものが問われている。我々は唯、国家に生かされてさえいれば良いのか。古代ギリシャの哲学者ソクラテスは『ただ生きるということではなく、善く生きることこそ最も大切にしなければならぬ』といっている。学問、文化、芸術はこの「善く生きる」ために必要なものである。従来からこの分野への国家予算は削減され続けてきている。このような危機の時だからこそこの知識が人間の生に効くのではあるまいか。そして「哲学」の出番である。

(4) 今求められる哲学

我々人間はこのような未知のものに対して「不安」を持つということは前号でも書いた。未知のものに対する過度な受身である「驚き」の感情から理性が揺るがされ「知性」を使って能動的行為を制御できなくなる。これが「不安の構造」である。それにこれも前号でお話したが、「インフォデミック」というデマやフェ

イクニュースにまみれ、加速するグローバル経済に翻弄されて不安定な生を送る現代人はこの「不安」が日常的なものになっている。そこで、人々は何か確実なものを求めている。そして、知性が支配する自然科学が一定の確実さを提供してきたのであるが、近年の自然の反撃にその基盤が揺らいでいる。「地震」「津波」による大破壊、そして「原子力」の危険性の暴露。さらに地球温暖化による気候変動、そして環境破壊。これらは全て人類の生存を脅かす「不安」である。科学は生活を劇的に便利にしたが、科学的分析の力によって我々はますます厳密に管理され、統治されるようになっていく。他方で、宗教に頼るのでも足りない。宗教に基づく非合理的な信念は、深刻な対立を引き起こしてきた。おそらく現代人は、科学でも宗教でもない「別の真理の領域」を求めている。その候補が哲学なのだ。哲学に、この時代の不安を託そうとしているのである。

(5) 「不安の哲学」

自然科学は人間の理性に信頼を置いてることより成り立っている。しかし、それ以前に前提としているのは「経験」である。「経験」とは過去の出来事の体験である。科学は「時間的」「場所的」に今までに起きたことだけに基づいて「未来」を予測しているのである。この予測が未知を明らかにして「不安」を解消してき

た。しかし、先にも言ったように近年はこの「予測」ができない事象が増えてきている。それは過去の経験データが未来の予測に結びつかないからである。「事象」の「原因」と「結果」には必ず「法則」が存在すると考えられてきた。そして、「事象」を分析すれば「結果」が予測できると考えられていたのが自然科学であった。現代は科学的理性の危機でもある。

「不安」、この理性の信頼の危機を19世紀に先んじて経験しているのが哲学である。人間の理性に信頼を置いてきた近代哲学が挫折したことによって生じたのがキルケゴールの実存主義哲学である。キルケゴールの『不安の概念』によると、「不安」とは人間の根源的な自由が体験する「めまい」である。人間は理性や知性など特定のあり方で本質を規定することのできる「実体存在」ではなく、心と身、可能と必然、永遠と時間、無限と有限など、相反するさまざまな要素をもつ「関係存在」である。人間はこれらの諸契機を自分なりに主体的に関係づけながら自己を形成していく自由な存在である。そして、自由であるということは、特定の本質をもたないという無のなかにいることとなり、無を前にした気分が「不安」をよぶのである。キルケゴールは、人間の根本気分であるこの不安をキリスト教の原罪と結び付け、神に背く人間が神との正しい関係を取り戻すことよってのみ、この不安を克服することができる。

と説いた。「自由」がなぜ「不安」になるのか、これも以前は話したことであるが、それは「責任」との関係があるからである。宗教で国王での権威にあった中世社会では個人の自由はなかった、しかし近代社会その制約から開放されて「自由」になったのであるが、逆にその行動の結果責任は個人に負わされることになった。現代の「自己責任論」は社会が一切を個人の責任におわせる「逆説的不自由社会」である。

さらに、ハイデッガーは『存在と時間』において、「不安」を分析することを通じて、人間にとっての存在が本来的には時間的な性格によって意味づけられることを示した。人間は自分の存在を未来へ向かって自分で規定していく自由をもつ。しかし、自由な可能性として存在しているそのことは、自分で選び取ったことではなく、不条理にも過去以来そうした仕方ですら投げ出されている。そして、わけもなしに自由であるそのことを、そのつどの現在ごとに人間が理解するとき、人間は不安の気分が襲われる。不安は存在のこのような時間性を露呈せしめるのである。そして、人間にとっての最大の不安は「死」である。

20世紀最高の哲学書と言われる、『存在と時間』が出版されたのが1927年。第一次世界大戦で、人類は初めて大量死を経験した。それまでは科学万歳、人類の進歩万歳でやってきたのが、それがとん

でもない間違いだったことに初めて気づいた。この間の「不安の時代」はこうした「気分」の中からファシズムやナチズムが生まれてきたこと。さらに「西洋の没落」。まさに「不安」とは、ハイデッガーによれば日常的世界が崩れ落ちて無意味になってしまった、寄る辺ない「気分」とされている。これまで「ある」と思っていたものが、実は「無」でしかなかった。一体「存在」とは何を意味するのか、ハイデッガーの「存在の問い」は、それ自体が生新しい基盤を求める切実な問いであった。

「何かがある」というとき、普通その意味は、その何かが目の前に「見えるもの」として「ある」ことだと考える。でもハイデッガーは、そうではないと言う。たとえば、目の前のコーヒーカップについて、それがカップであると言えるのは、私がそれをコーヒーカップとして使用するから。仮にそれを誰かに投げつけるために使うとすれば、それはカップとして存在しては、いない。単にカップの形をしたものが目の前にあるだけ。カップがカップとして存在するためには、カップを適切に使用することによってそれを「あらしめる」ことが必要だ、そうハイデッガーは言うわけです。あるものがそのものとして「ある」とは、そのものと同れわれとの「関係性」のうちでのみ成り立つ事柄である。キルケゴールの本質を規定するものは「実体存在」ではなく「関

係存在」であるという考え方と同じである。

ハイデッガーはこの「関係存在」こそが「本来性」であるといい、「非本来性」と区別している。さらに、ハイデッガーは人間の方も、単なる人間一般でなく、また、デカルトのいう誰とも置き換え可能な「私」でもない「自分だけの現実」を負わされている存在としての人間を「現存在」という言い方に変えて名づけている。「本来性」とはまさにそうした「負い目」を直視すること、他なるものの「存在」に対してしかるべき仕方ですら「覚悟」を意味している。人間が生きていることがそれ自身、さまざま他なるものの「存在」に対してよりよく応答すること、つまりそれを「あらしめる」ための終わりのなき努力なのだという。

近代哲学はデカルトの「我思う、ゆえに我あり」で始まった。それは「物体と精神」という二元論的世界の確立と人間理性の優位の上に立てられた。しかし、その「存在」を問われるとき物体的自然からの「自由」という「不安」が逆説的に舞い戻ってきた。そして、先ほど述べた「実存主義哲学」の流れが「存在」つまり「生きる」ことを、「関係性」や「意味」の問題として問うてきている。さらに哲学は20世紀中頃から進歩主義や人間中心の主体主義を批判する「ポストモダン哲学」に入っていく。しかし、多

様化する世界は哲学といえども一様に世界を捉えられていないのが現状である。さらに哲学の専門化が進み細分され過ぎているのも原因がある。

かつて20世紀の初頭に、ドイツの哲学者であるヘーゲルは、哲学に対して「ミネルバのフクロウ」という比喩を使った。「ミネルバのフクロウは、迫り来る黄昏とともに飛び立つ」と書いた。そのレトリックでヘーゲルが述べようとしたのは、哲学が「自分の生きている時代を概念的に把握する」ということだ。哲学の言葉によって概念化するということは言葉によって「関係性」の意味を明らかにして「生活」に入れるということだ。ポストコロナの哲学は今必要とされている。

大人の今昔物語(67)

石川 吾郎

今回は、古墳の穴に迷い込んだ男の顛末です。教科書に出ない度は一／五。

近江の国、篠原の塚穴に入った男の話(巻第二八 第四四話)

今は昔、美濃の国に方面をめざす身分の低い男が、近江の国の篠原という所を徒歩(かち)で通り過ぎようとしていた。

にわかには空が暗くなり雨が降りだしたので、雨をしのぐ場所を探し周囲を見回してみる。四囲は野原が広がり人気もない。かろうじて古い塚の穴(古墳)を見つけ、これに入ればしばらくするほどに、日が暮れて周囲が暗くなってきた。

雨は降りやまず降り続けるので、今夜はこの穴ぐらで夜を明かそうと覚悟をして穴の奥を覗いてみる。そこはかなり広くなっているようだ。壁に寄りかかって休んでいると、夜更けて何かが穴に入ってくるような物音がする。周囲は真の闇で何も見えない。音だけがするので、恐怖にとらわれる。さては鬼の住処の穴に知らずに入り込んでしまったのではないだろうか。男はいよいよ自分もこの世とおさらばだと、内心嘆いていると、この音がどんどん奥に入ってくる。男は恐怖に縮みあがってしまう。だが逃げるにそのすべもない。音を立てぬように片隅に小さくかがまっていると、このものは近くまで来て、何か荷物をどすんと置く。次にさらさらと音のする物を置いたようだ。その後で坐りこむ音がする。どうも人の気配だ。

この男、身分は低い男だったが知患者で、この状況を推測するに「これは人がどこかに出かけたが、雨に降られ日も暮れてきたので自分がしたのと同じように、

この塚穴に入ったのではないか。最初の音は荷物を置いた音で、次のさらさらという音は蓑を脱いで置いたのだろう」と考えた。「しかしこの塚穴に住む鬼かもしれぬ」と思うと、ただ音を立てないようにして耳をそばだてる。入ってきた者は男だろうか、坊さんだろうか、それとも下使いの者だろうかわからないが、人の声で言うには「この墓穴には、もし住んでおられる神様がいらっしやるだろうか。これを召し上がりませ。手前はさる所に参る途中、ここを過ぎる間にたいそうな雨に降られて、夜も更けてきたので今夜ばかりはと思ひ、この塚穴に入ってきた次第です」と言つて、供え物を置いた。男はこれを聞いて、そうだったのかと少し安心した。

さて、この供え物が置かれたのが男のそばだったので、何だろうかと密かに手を伸ばして探ってみると、小さな餅が三枚置いてある。男「鬼ではなく、人が道中に持っていたものを供え物にしたのだ」と合点して、歩き疲れて空腹だったので、この餅をとって密かに食べたのだった。

後できた者は、しばらくしてこの供えた餅を探してみたが、そこに餅はなかった。この時「鬼が実際にいて、餅をとって喰ったんだ」と思ったのだろうか、急に慌てて立ち上がるやいなや、持ってきた荷物も取らずに、蓑笠も棄てて逃げ走っていった。なりふり構わず逃げだした

ので、本の男「やった。だれか人が来たが、餅を取って喰ったのを怖がって逃げ出していった。しめた、よくぞ喰ったものだ」と思つて、この棄てていったものを探してみると、何かいっばいに入れた袋を、鹿の皮で包んだものであった。また蓑笠もある。美濃の方面から上つてきた者だな、と考え、またもし戻つて来るかもしれないと、夜の明けぬうちにその袋を背負つて、蓑笠を身に着け塚穴を抜け出して歩いていく。

「もしさっきのやつが人里に行つて、この事情を人に話し、人を連れて戻つてくるかもしれない」と思つたので、できるだけ遠くの人里離れた山の方向にしばらく行くうちに夜が明けてきた。

一息ついて、この袋を開けてみると、絹や布、綿などが入れてあった。思いがけないものだったので、「これは天の恵みだ」とばかり喜んで、目的地へと向かった。

この男、思わぬ儲けものをしたものだ。後の者が逃げ出したのもっともものことだ。誰とても逃げ出しただろう。先の男の度胸はたいしたものだ。

このことは、先の男が年老いてから子供たちに話したのを、聞き伝えたものだ。逃げ出した男は、最後まで誰ともわからないままだった。

こんなわけで、賢い知恵の回る人は、身分が低い者といつても、こんなときに

も冷静に行動して思いがけない儲けものをするにもなる。それにしても先の男は餅を喰らつて、後の男が逃げ出すのを見て、どれほどおかしかったらうか。極めて珍しいことなので、このように語り伝えられていることだ。

《コメント》

この話しの舞台となっている篠原は、現在の滋賀県近江八幡市の一部。JR琵琶湖線に篠原駅があります。実際にこの付近には古墳が複数あるようです。

知らないことによる恐怖は、普遍的な心理といえます。中世に生きる人がどんなに周囲の世界への恐れとともに生きていたかを垣間見ることのできる話ではないかと思ひます。

一見笑い話の中に、中世の闇の深さに思いを致すとき、現代に生きるわれわれにとつても他人事ではないことに気づかされます。

コロナウイルスのパンデミックという災厄、それに続く予想される大恐慌以上の恐慌への無知と恐怖。過去の人を唾うことはできないと、つくづく思います。私たちはこの主人公の男のように、ありつたけの知恵を働かせて、パニックに陥らず冷静にこの困難を乗り越える必要があります。

オクラの山たより (44)

困了生

一

一七四二(寛保二)年、師である宋阿が亡くなって以後、下総国結城を拠点とした蕪村の東北・関東巡遊は十年に及びました。結城の地に宋阿同門の砂岡雁宕、芭蕉の孫弟子ともいえる早見晋我、その子桃彦がおり、近くの下館には中村風篁、宇都宮には露鳩などと俳諧好きな人が多く、蕪村にとっても居心地のいい地であったに違いありません。

浄土宗の僧でもあった蕪村は時には地元の弘経寺(ぐぎょうじ)という浄土宗の寺に寄宿することもありました。当寺は関東十八檀林の一つとして浄土宗の中で重きをなしており、そのトップは芝の増上寺です。江戸に出た当座、蕪村は増上寺の裏門付近に住んでいたという言い伝えもあります。

結城の寺では俳諧の活動だけではなく折に触れて絵筆も振るっていたようで弘経寺には襖一面に梅を描いた大作が残されています。

この時代の有名な作品には下館の俳人仲間中村風篁宅で柔らかな筆法によって大和絵風に描かれた「追羽子図杉戸絵」そして明代の著名な文人画家文徵明の絵を模写した「文徵明八勝図模写」などが

あります。こうした絵はおそらく絵師修業のために次々と描いたものでしょう。

その他にも「子漢」「四明」の落款を持つ結城・下館時代の作品が多くあります。蕪村が遊歴の時期であったことを考えると絵画の制作においては直接的で特定な師を持っていたのではなく、その修行は専ら独学により「芥子園画伝」などのテキストや実際に目にした作品によってなされたものと考えられます。蕪村にとつて結城・下館時代は俳諧修行だけではなく絵師の修業においても大きな意味を持った時代でした。

この結城の地にいた一七四四(延享元)年、あたかも亡き母の十七回忌の年にそれまでの俳号であった「宰鳥」を「蕪村」と改め初めての自選歳旦帖を編集刊行しました。この歳旦帖で

古庭に 鶯啼きぬ 日もすがら

という蕪村のデビュー作を載せているのはすでに述べたとおりです。

この記念すべき「寛保四年歳旦帖」の扉に編者名が「溪霜蕪村輯」とあるのは注目すべきことかもしれません。「輯」はもちろん編集の意。問題なのは「溪霜蕪村」です。「溪霜」とは霜に覆われた谷のことですが、「溪」には蕪村の生家の姓とされる「谷氏」の意味が重ねられていると考えられています。それは一家離散の憂き目にあった谷氏であり、寒々

と霜に覆われた故郷の生家のイメージに包まれた世界でした。小川環樹等編の角川書店「新字源」によれば「溪」は「谿」と同義であり、行き詰まりの谷、水のないう谷(虚谷 からだに)の意です。真っ白な霜におおわれた水の流れも感じられない行き止まりの谷。この「溪霜」の冷え冷えとしたイメージが自分自身の存在する精神的な世界のイメージと同一とすれば、それは蕪村、それは荒廃した村という意味ですが、この俳号とどう関わるのでしょうか。そして、これからの蕪村の作品とどう絡んでくるのか。考えてみたい問題です。

多くの人に支援を受けた下総の地ですが、なかでも深い関わりを持ったのは早見晋我でした。早見晋我、名は次郎左衛門。彼は家業の酒造業を営むかたわら、芭蕉の弟子其角にも学んだ経歴があり、地元俳壇の重鎮とも目されていました。

この早見晋我について蕪村は晩年の「新花摘」におもしろいエピソードを書き残しています。

中村風篁宅に宿泊した晋我は深夜にふと目を覚まし、狐の一群が縁側にずらりと居並んでいるのを見て、肝をつぶして大声をあげたのです。家の中にいたみんなが起き出してきて「賊でも入ったのか」と大騒ぎをしているなか、その物音で我にかえると厠の戸を叩いて「みんな早く起きて助けてくれ」と叫んでいる自分に気づいたということです。

晋我という何とも純朴な翁を彷彿とさせる話です。普通であれば人にはまず話すことはないこんな失敗談を思い出して蕪村に語ったのでしよう。よほど気を許した間柄だったに違いありません。蕪村と晋我との年齢差は四十六歳。年老いた父とその子といった関係ですが、晋我は偉ぶることもなく、まるで親友にでも接するように気安く蕪村と付き合ったように見えるではありませんか。

この晋我が一七四五(延享二)年一月に亡くなりました。享年七十五歳。三十歳となっていた蕪村はその逝去を悼んで一編の和詩を作りました。題して「北寿老仙をいたむ」。「北寿」とは晋我の隠居後の号で「老仙」とは俗世を脱して悠然たる晋我の尊称です。次に示したとおり俳句でも和歌でも漢詩でもない、日本文学史上にかつてなかった形式の詩であり、歌です。

二

次に掲げたのは「北寿老仙をいたむ」です。読みやすいように原文の表記を一部改めてあります。

北寿老仙をいたむ

君あしたに去ぬゆづべのころろ千々に
何ぞはるかなる

君を思ふて岡の辺に行つ遊ぶ

岡の辺何ぞかく悲しき

蒲公の黄に薺の白う咲たる

見る人ぞなき

雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば

友ありき河をへだてゝ住にき

へげのけぶりのはと打ちれば西吹風の

はげしくて小竹原真すげはら

のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にき今日は

ほろゝとも鳴かぬ

君あしたに去ぬ ゆうべのこゝろ千々に

何ぞはるかなる

我庵のあみだ仏ともし火もものせず

花も参らせずすゝことイめる今宵は

ことに尊き

釈蕪村百拜書

語注

「へげ」は変化。「雉子」はキジ。「け

ぶり」は獵師の鉄砲の煙。「はと」は「バツ」との意です。

この「北寿老仙をいたむ」を一読されてどのような感想を持たれたでしょうか。詩人萩原朔太郎はその著「郷愁の詩人と謝蕪村」の冒頭で、この作品の最初の四行、つまり

「君あしたに去りぬ

ゆうべの心千々に何ぞはるかなる

君を思つて岡の辺に行きつ遊ぶ

岡の辺なんぞかく悲しき」

を引用して次のように評しています。

「この詩の作者の名をかくして、明治時代の若い新体詩人の作だと言つても、人は決して怪しまないだろう。しかもこれが百数十年も昔、江戸時代の俳人と謝蕪村によつて試作された新詩体の一節であることは、今日僕らにとつて異常な興味を感じさせる。」

「北寿老仙をいたむ」に初めて接した朔太郎の驚きと興奮が伝わってくるようです。この朔太郎の言葉のためか、多くの研究者がこの作品の読解に取り組んできましたが、そうした努力にもかかわらず多くのナゾのある作品です。

作品の内容へと入る前の予備知識として「北寿老仙をいたむ」がいつ書かれた

作品なのかについて触れる必要があります。これがなかなか厄介な問題なのです。

一七四五(延享二)年一月に亡くなつ

た晋我は七十五歳。蕪村は二十歳でした。その死を悼んで、その年の内に書いたといいたいところですが、そうはいきませぬ。「北寿老仙をいたむ」が初めて世に出たのは一七九三(寛政五)年のこと。

二世晋我(早見晋我の子である桃彦のこと)が編んだ晋我五十回忌追善集「いそのはな」においてです。蕪村の死後すでに十年が経っていました。そのあたりの事情を二世晋我は蕪村の「北寿老仙をいたむ」の末尾に次のように記しています。

「庫のうちより見出でつるまま、右に

しるし侍る」

この付記と作品の末尾にある「釈蕪村百拜」の記述(蕪村は四十代半ばで還俗していますので、「釈」が僧侶であることを示す語である以上、それ以前の作となります。)から「北寿老仙をいたむ」がいつ公表されることなく五十年にわたつて早見家の蔵の中にあつたことは間違いないことだといわれてきました。つまり「北寿老仙をいたむ」は文字通り「北寿老仙」の霊前にささげるためだけに三十歳の蕪村によつて書かれた作品だといふことになります。

これが通説ですが、講談社版「蕪村全集」の編者の一人である尾形竹氏氏は蕪村

六十二歳、「春風馬堤曲」と同時期の作

としています。その理由は何といつても、

この作品全体に漂う友人の死を悼むかのような雰囲気です。それは「君」という呼びかけや「友ありき」という言い方にもよく示されています。七十五歳の晋我三十歳の蕪村。かたや結城俳壇の長老的存在にして重鎮。かたや初めて自選の歳旦帖を出したばかりの駆け出しの俳諧師。この二人の間柄であたかも友人どうしのような言葉使いが適切な表現なのであるうか、というのです。若き日の作か晩年の作か。それによつて作品の理解も少し変わってくるのはいうまでもありません。

三

とりあえず、ざっくりと「北寿老仙をいたむ」の全体を見てみましょう。

一読、まず驚くのは近代詩と見紛うばかりの詩のリズムとスタイルの斬新さです。

七音・五音を基調としながらも、その間に二音・三音・四音などを入れ込んだ音律の自在さ。「君(きみ)」「雉子(きぎす)」「などの不音の頭韻を重ね、「はるかなる」「行きつ遊ぶ」「咲たる」などの二音や「悲しき」「見る人ぞなき」「住にき」などの一音の脚韻を交えた声調の抑揚をきかせた流麗さ。どれもが表現内容とマッチしてみずみずしい叙情をたた

えています。そうしたリズムとスタイルは日本の詩歌のいずれにも類似例はありません。

そして目につくのは「君あしたに去ぬ ゆうべのこゝろ千々に何ぞはるかなる」と「友ありき河をへだてゝ住にき」のリフレインです。「君」や「岡の辺」などの反覆表現。これらは朔太郎のいうように確かに新体詩の詩人たちが以降の近現代の詩人たちが多用した技巧です。もちろん蕪村は近現代の詩などを知るはずありません。「あした」と「ゆうべ」、「黄」と「白」といった待遇表現、「何ぞはるかなる」といった漢文訓読調のような表現から見ると漢詩、それも楽府（がふ）の形式を踏まえたものといわれています。

もとをたただせば楽府は前漢の時代に宮廷に設けられた音楽機関の呼称です。この機関の主な仕事は政治に資するための民間歌謡の採集にありました。つまり、中国の古代王朝に設けられた採詩官の復活であり、「詩経」を纂定した孔子の意図を継承再現しようとしたものでした。そのため「詩経」がそうであるように楽府には濃厚に民間の歌謡の色合いがあります。たとえば「江南可採蓮」は蓮の実取りの労働歌ですが、古い楽府の内容と形式をよく伝えています。

魚戯蓮葉間 魚は戯れる 蓮の葉の間
魚戯蓮葉東 魚は戯れる 蓮の葉の東
魚戯蓮葉西 魚は戯れる 蓮の葉の西
魚戯蓮葉南 魚は戯れる 蓮の葉の南
魚戯蓮葉北 魚は戯れる 蓮の葉の北

右のように「江南可採蓮」では同語反復のリフレインの句が続きます。こうした繰り返される句は単純な手仕事の反覆をはずませる効果を持ったはずです。蕪村はこうした漢詩の一部にある手法を取り入れたのでしょうか。なお「田田」は大きく分厚い蓮の葉の様子であり、「魚」は「吾」と、「蓮」は「憐（いとしい人の意）」と、それぞれ撥音が類似します。つまり「魚戯蓮葉間」とは「おいらはからかう、可愛い娘さんたち」を同時に意味します。江南の温和で明媚な風光の中で健康かつ自由奔放な若い男女が時にはじゃれ合いながら、この歌を口ずさみつつ嬉々として船を漕ぎ回って蓮の実を採っている情景を想像してみてください。まさしく孔子のいう「思無邪（思いよこしまなし）」の「詩経」の世界につながる純粹な歌声でしょう。

四

作品の内容を見ていくと

1 死の悲報と傷心

2 岡の辺の逍遙

3 逍遙で耳にした雉子の独白

4 転調（1のリフレイン）
5 弥陀の賛仰
と読むことができます。

以下、読解を進めますが、まず語られるのは親愛なる晋我の突然の死と悲しみの深さです。悲報に接したその夕方に作者の心は「千々に」乱れます。ここで問題になるのは「何ぞはるかなる」です。一般的には「あなたは何と遙かな遠くに行ってしまったのか」と解しますが、それでは直前の「ゆうべのこゝろ千々に」という激しい心の乱れとスツキリとながりがありません。やはり「ゆうべのこゝろ」をいかして「はるか」を「杳か」として「心が曇って暗い」とした方が良いのではと個人的には思います。そうなると「何ぞはるかなる」は「何と暗く晴れやらぬことか」という意味になります。

次に岡の辺の逍遙となりますが、この「岡の辺」は雉子の独白に「河をへだてゝ」との関係からいうと川沿いの堤だとイメージできます。この川は結城用水でしょうか、いやそれとも結城近くを流れる鬼怒川でしょうか。いずれにしてもその「岡」は晋我とともに歩いた思い出の地なのでしょう。その堤にはタンポポやナズナの花が咲いていました。

蛇足ですが、民俗学者によれば古代の人にとって「山」や「川の堤」は生命をつなぎとめる場所という意味を持っていたとか。「君を思ふて岡の辺に行」くという行為には死者に会いたいという古代

人の心情につながる心の動きがあったのかも知れません。

「雉子のあるか」とあるのはタンポポや薺の花にぼんやりと目をやっていた放心状態から、ふと、雉子の鳴き声に気づいたこといつているのでしょうか。「ひたなきに」つまり、ひたすら鳴いている雉子の声を聞くと、「河の向こうに住んでいた友は漁師の放った鉄砲に撃たれて卒然と世を去った、もう今日はホロロとただの一声も鳴かない」と嘆いている。その声が聞こえてきたということです。

この雉子の独白が雉子そのもの嘆きではなく雉子に擬した亡き晋我への追慕の情であることは明らかです。敬愛する晋我の声をもう聞くことができないう蕪村の胸を強く突き上げる強い思いを「今日は ほろゝとも鳴かぬ」と雉子の声で表現したところがこの作品の眼目でありましょう。

この「ほろろと鳴く」雉子の鳴き声について伝統的なイメージがあつて、たとえば、

春の野の しげき草葉の 妻恋ひに

飛び立つ雉子 ほろろとぞ鳴く

平貞文 古今和歌集 1033

山鳥のほろほると鳴く声聞けば

父かと思ふ母かと思ふ

行基 玉葉和歌集 2627

とあるように雉子の鳴き声は「妻恋ひ」

や「父母を恋う慕情」という魂の故郷を求めるような心情の象徴として用いられてきました。雉子の鳴き声が妻を恋い父母を慕う心の象徴に使われるのは、その二つをつきつめていけば、自分にとつて大事な存在、しかも今は姿の見えぬ存在を求めるといふ等質なものへと行き着くからです。この伝統的なイメージにそって詠んだのでしょうか、芭蕉にも

父母のしきりに恋し 雉子の声

「曠野」 元禄元年

という句があります。

さらに「ほろろ、ほろほろ」と鳴くキジの声には、それ自体にすでに失われてしまったものへのほろ苦い哀愁を帯びた響きがあります。父とも慕い敬愛した北寿（晋我）追悼の慟哭には、失われた故郷そして亡き父母への慕情が耐えがたいほどに蕪村の心を衝き上げていたのではないのでしょうか。そういう意味ではこの「北寿老仙をいたむ」は萩原朔太郎のいう「時間の遠い彼岸に実在している、彼の魂の故郷に対する『郷愁』」を北寿の追悼のかたわら表現した作品といえます。

獵師の撃った鉄砲の硝煙が西風に吹かれ亡き人の魂が荒野に消え失せた後で「ほろゝとも鳴かぬ」と雉子の話は終わります。その後を生じた沈黙の空白が本当に効果的に使われています。そして、

「君あしたに去ぬ ゆうべのこゝろ千々に何ぞはるかなる」という冒頭の言葉が繰り返されます。素晴らしい詩のみに可能な「言葉の音楽」です。黄昏の岡の辺の逍遙はこの悲嘆の高まりで終わり、場面は夜の草庵へと移ります。

「我庵のあみだぶつ」に「もし火もものせず 花も参らせず」とあるのは、我が庵の阿弥陀仏には御灯明も供花もないことをいっており、その御姿が薄明のことでしょんぼりとなすすべもなく立ち尽くしているように見えるということです。人間の煩惱と避けがたい運命の数々を目にして「はて、どう救ったものか」と困惑し佇立する仏様の姿です。人間の抗いがたい苦しみを救ってくださるのが、この人間くさい仏様だと思えば、いつにも増して尊く仰がれるよ、という阿弥陀仏への詠嘆で作品は終わっています。

最後に一言。尾形仿氏は作品の末尾にある「ことに尊き」について面白い見解を出しています。

一七七（明和八）年、太祇・鶴英と

続けて俳諧仲間を失った蕪村は「叢虫説」

を書き併せて次の句を詠みました。

みの虫の ぶらと世にふる 時雨哉

前書きにもなっている「叢虫説」によれば句意は自分には芭蕉翁の風雅の衣鉢を継ぐという気概も気負いもなく、叢虫の境遇にひたすらあこがれて、ただぶらぶらと、気ままに生きていたのだ

け、ということ。尾形仿氏は「ことに尊き」には蕪村のこうした心をチャリと見せたものと読めるかもしれない、つまり、何事も弥陀のはからいに任せきったと。長年の知己を失って気落ちも甚だしく蕪村の気力もなえていたのでしょうか。もはや老境にさしかかった蕪村の心境をわずかばかり示したもので、というわけです。

隠された歴史（19）

満田正賢

「隠された歴史（1）」において「記紀（古事記・日本書紀）」で研究する前に記紀を研究しなければならぬ」という坂本太郎氏の言葉をご紹介し、記紀研究の具体的な実績として、森博達（もりひろみち）氏による「仮名表記の違う二種類の歌謡をそれぞれ包含する二種類のグループ

「正しい漢文で書かれた巻の群」²群、と漢文に倭習（日本固有の漢文表記）の見られる巻の群¹群」の発見をご紹介しました。そしてまた、森氏の発見を受けた谷川清隆氏の、天文観測の有無を基準とする「天群（七世紀の群）の人々、地群（七世紀の群）の人々」という区分けをご紹介しました。

谷川氏は、「天群の人々」というのは「旧

唐書」に現れる「倭国」であり、²群というのは天群の人々（倭国）の資料を記載したものである。¹群の中に現れる倭習の部分も天群の人々（倭国）の資料を一部分借用したものであるかと考察しています。さらに谷川氏は天群と地群にある多くの相違点を挙げています。例えば天群にのみ屋久島との交流が記載されていること、「百寮」という表現が天群にあって地群にないことなどです。そして、重要な相違点として、新羅に対する接し方の相違「新羅との交流記事の内容に偏りがあり、天群の人々は新羅に敵対的、地群の人々は新羅に友好的であった」という点を挙げています。この詳細は「白村江を戦った倭人―『日本書紀』の天群・地群と新羅外交」（古田史学の会の最新論集『古事記』『日本書紀』千三百年の孤独・消えた古代王朝―古代に真実を求めて第二十三集・明石書店）に収録）で展開されています。私はこの谷川氏の説の基本的な部分には同意しています。

さて、この論文の中で谷川氏は新羅に対する接し方の考察を推古八年（六〇〇年）の記事から始めています。そして推古八年以降一貫して新羅に敵対的な天群の記事であったが、孝徳大化二年（六四六年）九月の「小徳高向博士黒麻呂を新羅に遣して貢質らしむ。遂に任那の調を罷めしむ」という記事において初めて新羅に好意的な地群の記事が出てくると述べています。

この谷川氏の考察に対し、私は新羅に友好的な（というよりも百済との友好関係に懐疑的な）地群の記事の初見は敏達十二年（五八三年）の日羅記事ではないかと考えています。今回は百済に対する見方が日本書紀全体の中で異常性を発している「日羅記事」を取り上げて、その記事の意味を探っていきます。日羅に関する記述は、聖徳太子伝暦、扶桑略記、

今昔物語にもありますが、ここでは日羅は百済から来た高僧で幼い聖徳太子を聖人として敬ったと記述されています。これらの記述は、「日羅が百済の従者に暗殺されようとした時全身から火焰が生じた」という日本書紀敏達紀の中の記事を元に何者かが日羅を後光のさす僧という存在に作り替え、そのフィクションを聖徳太子伝説に利用したことから広まったものと思われまます。

まず日羅記事の概略をご紹介します。日羅記事は日本書紀・敏達紀の記述のほぼ三分の一を占めています。

①日羅（にちら）は百済に仕えていた日本人で、百済王威徳王から二位達率（だつそつ）と極めて高い官位を与えられていた。

②敏達天皇は敏達十二年（五八三年）に、任那復興の相談をしたいと考え、百済に賢くて勇があるとと言われる日羅を招聘しようとして紀国造押勝と吉備の海部直羽島を百済に派遣したが、百済が許さなかった。

③この歳再び羽島を百済に派遣し、羽島はひそかに日羅の家を訪ねた。日羅は策をめぐらせて、（家の女に男を誘うふりをさせて）羽島を家に招き入れ、百済王が逆らえないよう厳かに勅を宣言するよう羽島に計をさすけた。百済王は逆らえず、百済人の大使・恩率（おんそち）、副使・参官その他の付き添いを付けて日羅を帰国させた。

④日羅たちは吉備の児島で大伴糠手子（あらてこ）連に迎えられ、難波の館で大夫たちの訪問を受けた。この時日羅は甲（よろい）をつけ馬で門の前に出向いてひざまずき、「宣化天皇の代に我が君大伴金村大連が海外に派遣した火（肥後国）葦北（現在の葦北郡と八代市）国造・刑部部阿利斯登（おさかべのゆげいべのありしと）の子である臣（私）達率日羅は天皇が召すと聞き恐れかしこみて来朝しました。」と言い、甲を天皇に奉った。

⑤日羅は阿斗桑市（あどくわのいち）の地に館を与えられた。

⑥敏達天皇は、阿部目臣、物部贄子（にえこ）連、大伴糠手子連を日羅のもとに遣わして、国政のことを聞いた。日羅の答えは（原文を簡略すると）、「人民を安んじ富ましめ国力を充実したうえで百済の国王を召してその罪を問うべきである。船を連ねて威を示せば百済は帰服するであろう。百済は密かに九州に領土拡大を謀っている。防御を

固め欺かれぬようにすべきである。」という内容で、百済の内部情報をばらすものであった。

⑦百済の大使・恩率、副使・参官が帰国する際に、難波に残った部下の徳爾（とくに）、余奴（よぬ）などに日羅の暗殺を命じた。大使が血鹿（ちか）五島列島から出発する時、日羅は阿斗桑市から難波の館に移った。徳爾たちは日羅の身の光が火焰のようであった為なかなか殺せなかったが、同年十二月光を失うのうかがつてついに暗殺した。

⑧日羅は蘇生して、「自分の暗殺は百済の使者によるものである。けして新羅のしわざではない。」と言った。

⑨日羅の遺体は、物部贄子と大伴糠手子により小郡の西のかたわらの丘に埋葬され、妻子は石川の百済村（現富田林・河内長野か）に住ませた。又、徳爾らを捕縛して、参官の指示であることをつきとめた。

⑩日羅の一族を招集して、罪を決めさせた。葦北の君たちは、全員を処刑し彌売島（みめじま＝大阪市姫島か）に捨てた。日羅の遺体は後に葦北に移葬された。

⑪海辺の者の話では、百済の使者のうち、恩率の船は風で沈没し、参官の船は対馬に漂流して、帰国することができた。日羅記事がフィクションである可能性について考えてみます。日羅が暴露した

百済の計画は、「筑紫を百済の分国にする為にまず三百隻の船に女人小子を乗せて筑紫に送り込もうしている。」と詳細が記されています。そして日羅は壱岐・対馬に兵を潜ませてこの三百隻の女人小子を殺せと進言しています。ここには百済の筑紫植民計画の深謀とそれを阻もうとする日羅の愛国心（？）と非情さどが記述されています。日本書紀全体では、継体紀以降孝徳紀まで、この日羅関係の記述を除けば、一貫して百済は大和朝廷と良好な関係を持つ友好国として記述されています。又、この友好関係に反して新羅と結びつく勢力として、筑紫君磐井の他、欽明期に任那・日本府の実権を握っていた阿賢移那斯（あけえなし）、佐魯麻都（さろまつ）などが記されています。百済を、日本侵略を図る警戒すべき国として描く日羅関連記事は日本書紀の中では明らかに異質です。

倭国と百済との友好関係は日羅事件以降も変わっていません。仮に日羅関連の記述をフィクションの挿入と考えると、あえてこのような異質なフィクション記事を挿入した意図がわかりません。しかも、大友金村は敏達の前の欽明期に物部尾輿等から任那四県の百済への割譲の責任を追及されて失脚しています。日羅が大友金村を「我が君」と奏したことも同様にフィクションであればその意図がわかりません。したがって日羅関連の記述は史実をとりあげて記述したものである

と考えるべきです。

そして、この一連の日羅記事で気付くことは、日羅の帰国に際して、中継地としての筑紫が出てこないことです。継体紀に磐井の乱の記述があり、続く安閑紀には筑紫の屯倉の設置記事があり、さらに続く宣化紀では、那津官家設置の詔が発せられています。この詔では、「筑紫国は外国が朝貢してくるところであり、外国との往來の関門にあたる。」と述べられています。この筑紫を素通りさせて吉備の児島で使者を迎えていることは明らかに異常です。ところが、日羅紀の詳細を読むと、日羅は難波においてかなり自由な行動をしています。百済の大使・恩率、副使・参官はとも日羅とは行動を別にしており、部下に日羅の行動を見張らせていたのではないかと思われる節があります。そして、百済の大使・恩率、副使・参官が血鹿（ちか〓五島列島）から出発していることから、大使・副使は日羅と離れて、筑紫を訪問していた可能性が高いと思われる。

日羅が百済の高級武官であるにも係わらず、百済王の意思に反して策を用いて日本に帰国し、敏達に「朝鮮半島への当面の出兵を抑えて三年間富国強兵策をとった後に大軍（船）と優秀な外交官を派遣して百済を従わせるべし」と進言する一方で百済の筑紫植民計画を暴露した行動はあたかもスパイのごとき行動です。実際に日羅は「我が君」大友金村からスパイの密命を帯びて百済に潜入していたのではないのでしょうか。

私が今回まで展開してきた後期九州王朝に関する仮説と谷川氏の仮説を重なり合わせてみます。倭国を乗っ取った後期九州王朝は谷川氏のいう天群の人々に相当し、後期九州王朝の支配下にある近畿勢力は谷川氏のいう地群の人々に相当します。日羅関連記事が史実とした場合、地理的な記述からみて日羅が会いに行った敏達は近畿におり、いわゆる地群の人と考えられます。そして、葦北国造は地群の人々（近畿勢力）と直接に繋がっていた勢力です。

日本書紀の継体以降の一連の記述を見る限り、百済と倭国（天群〓後期九州王朝）とは友好関係を保っており、磐井（前期九州王朝）とその出先機関であった任那日本府がそれとは対立する外交政策をもっていたという構図しか読み取れません。百済は友好の影に隠れて密かに筑紫を都とする倭国（後期九州王朝）の乗り取りを計画していたのではないでしょう

か。近畿にいた勢力は百済の倭国植民計画を未然に防いだ。そしてその殊勲者とされる日羅を葦北に移葬して、後期九州王朝の支配下にありながらも、実質的な権力を持ち始めた近畿勢力の力を知らしめたのではないのでしょうか。又は地群（近畿）の日羅伝承を、白村江の大敗へ向かう後期九州王朝に警鐘を発していた証左として日本書紀の中にあえて記したのではないのでしょうか。

なお、日羅の父である刑部鞞部阿利斯登の葦北国造という職位には意味があると考えます。大友金村が勢力を誇っていた継体期に磐井の乱が起きています。葦北は火君の所在地であった八代（氷川町）のすぐ南に位置します。継体の磐井（前期九州王朝）制圧の重要拠点として、まづ磐井の支配下にあつた火君勢力を筑紫方面に追いやり葦北に継体側の前線基地を置いたのではないのでしょうか。葦北国造とは前期九州王朝及びその支配下にある火君と対立するこの前線基地の長だったのでないのでしょうか。そして、葦北国造は後期九州王朝成立後も地群の人々（近畿勢力）と直接に繋がっていたと思われま

す。日羅は聖徳太子伝暦において、「敏達天皇の前で聖徳太子を救世観世音菩薩の生まれ変わりと崇めた上人」という存在に変化させられています。そしてこの聖徳太子伝暦の記述を元に日羅伝説が生まれ、近畿と九州各地に日羅の名称を持つ寺が

作られたと考えられます。すなわち後の大和朝廷による厩戸皇子・聖徳太子キャンペーンと日羅上人伝説とは一体であったと考えられます。

後期九州王朝は、宣化の長子が筑紫に移った初期の段階では近畿の勢力を実質的な支配下に置き、同時に倭奴国の歴史を引き継ぐ倭国の正統王朝という対外的な建前も同時に保持していたと思われる。しかし、百済一辺倒の対外政策に近畿勢力が疑問を持ち始めたこの日羅事件を境にして、しだいに近畿勢力が距離を置くようになり、独自の対外政策を持ち始めたと考えられるのではないのでしょうか。

道をゆく (13)

成瀬和之

「伊勢本街道」(七) 上多氣

二〇一九年一〇月二九日(火)

今回は、興津〓飯坂峠〓上多氣〓北畠神社〓櫃坂峠〓上仁柿と一五キロメートル歩く予定でしたが、京都のフィールドワークと重なり、参加できませんでした。それで、二〇二〇年三月一七日(火)、この日は次の「伊勢街道ウォーキング」の日だったので、コロナ騒動で中止

となつたので、一人で上多氣に「復習」

に行くことにしました。上多氣は伊勢国司北畠氏の本拠地です。南北朝時代に本拠地であった田丸城を北朝軍の攻勢によって攻め落とされた北畠氏は城館を天然の要害に囲まれた上多氣に移し、伊勢と吉野、伊勢と奈良・京都を結ぶ軍用路として伊勢本街道を整備しました。今も霧山城跡や北畠神社にある庭園に往時の栄華を偲ぶことができます。

北畠氏館跡は、北畠神社境内を中心に西を山裾、それ以外を川で囲まれた場所にあります。

北畠神社には北畠親房とその子頭家・頭能兄弟が祭られています。長子の陸奥守鎮守府將軍頭家は弱冠二一歳で阿倍野(大阪市)の露と消えました。阿倍野神社に祭られています。

伊勢国司としての北畠氏の支配は、頭能から二百数十年続きましたが、織田信長によって滅ぼされました。

館跡内で行われた学術調査の結果、一五世紀末〜一六世紀初頭には大規模な造成が行われ、中世城館では最古となる南北二列の石垣が設けられ、土器からは京都文化との繋がりが明らかになっていきます。

また、北畠氏館庭園は曲水池泉の鑑賞式庭園で、戦国時代の庭園として非常に著名なものであり、庭園は、「米」字形にする園地と立石による枯山水からなります。入場料は三〇〇円でしたが、誰もお

らず、一人で名園を堪能できました。

城館の裏山には詰城があります。庭園の左手の山道を一・五キロメートル程登ると、霧山城跡に出ます。霧山城跡は、館跡から比べて約二四〇メートル高い山頂に位置します。一部一六世紀代の改修を受けているようですが、その構造から館跡詰城も含めていずれも一四〜一五世紀代の築城とされ、館跡と一体の遺跡と考えられています。霧山城跡からの眺望は三六〇度のマウンテンビューです。大和から吉野の山々を見わたせ、伊勢への街道を見下ろし、まさに天然の要塞であり、伊勢街道沿いでは屈指の絶景の場所です。

コロナ騒動の中、自家用車で行きましたが、道路もホテルも空いていて、「人混み」から逃れ、森林浴の恵みをたっぷり味わうことが出来ました。

「今は夢見よう、旅は後にしよう」とスイスの政府観光局は呼びかけているそうです。コロナ危機の終息後にそなえて、旅の「復習・予習」でも致しましょう。



編集後記

中学校の国語の教科書に載っている評論に大岡信の「言葉の力」という文章がある。次はその中の一節。

「言葉というものの本質は、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにある」

この言葉を引く張り出したのは新型コロナに立ち向かうリーダーたちの発する言葉のことをつい考えてしまうからである。何も具体的なことは語らず国民に要請だけを語る首相。官僚の書いた原稿を読んでいるとしか思えぬその語り口。マスコミからは「自分の言葉で語れ」と批判されていた。「誤解」をした国民・現場の人々が悪いと言わんばかりに責任逃れをする厚労大臣。大岡信によれば、この人達の持つ人間世界はあきれ返るほど薄く狭いに相違ない。もはや「バカか」と言う気にもなれない。

バカにつける薬というわけでもないが、最近、心に残った言葉の一つ。新型コロナウイルスとの戦いに先頭に立って奮闘するニューヨーク州のクオモ知事の言葉。彼は「私は逃げない」姿勢を力強く市民に訴え多くの信頼を得た。

「私が全責任を取る。不満や他人を非難したい気持ち、苦情があれば、私を非難してほしい。私以外にこの決定に責任のある人物はいない」

日本にかつていた古武士の潔い覚悟を思わせる「私を非難してほしい (Blame me)」というきっぱりとした言葉。まず、なんといつてもかっこいい。これに比すれば我が国のリーダーたちの言葉の何と弱々しいこと。そこには我が国に押し寄せた困難事に立ち向かう真剣さは感じられない。

自分の経験から考えても言葉を発するということはつくづく難しい。言葉一つで聞く人を奮起させ、狂喜させ、失望させ、時には激怒させたりもする。このことに首相以下日本のリーダーたちはいかほど意識しているか。これからも注視していこうと思う。ただ、内田樹さんによれば「朝三暮四」のサルに如く我々は「サル化」しているそうだから、このこと自体、私にとつて難しいことかもしれない。 S K 生

◇お詫びと訂正

百五十九号の俳句の欄で土田裕さんの作品に間違いがありました。

「砂噴いて底の煌めき水温む雲に釣り人も浮きも動かず目借り時」

と紙面ではなっていました、

「砂噴いて底の煌めき水温む」

「釣り人も浮きも動かず目借り時」という二句の作品でした。土田さんにお詫びを申し上げるとともに訂正を致します。

ふみの道草 (23)

山椒魚

人間をうたう

川柳は五七五に人間をうたう。森羅万象、何でもうたうが、しかしそこには生きている人間が、多くの場合作者である「私」が顔をだす。「私」はあなたであつてもいい。人間一般ではなく、この人でありあの人である。そのようにうたうことで、逆に、誰にでも当てはまる人間の姿が浮かび上がる。妙を得た川柳に出会うと、人は思わず膝を打つ。

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑
人生は暗い冷たい中へ起き
ぬぎすててうちが一番よいといふ
涙ぐんだ時に箒の手がとまり
子は育つ壁はぼろぼろ落ちよるが
知ってるかアハハと手品やめにす
る

唇を盗み終身刑になる
七十で老人の人まだの人
多喜二を思う彬を思う冬立つ日
暁を抱いて闇にいる蕾
地下室のキリンよ岩井章が死んだ
ここには詠まれて百年が過ぎた句もある。先頃、山椒魚は、とある川柳誌の近詠欄「豊後梅」に寄せられた句の作品鑑賞をした。以下は、わが拙い返句である。

春一番心の扉ノックする
タンポポがフワッフワッと
咲く春だ
大草原炎が走る阿蘇の春

発芽して双葉に夢の無限大
―万物が笑いはじける春である
孫よりのうれしい電話サクラサク
孫受験はじける笑顔Vサイン
ランドセルゆらし元気な新学期
―新しい世界に夢をひらく子ら

ウイルスの休みばあばと孫が来る
子等の声なき教室が春を待つ
令和の世宿題背負い孫疎開
―爛漫に新型コロナ影落とす
―誰にでも守る覚悟の明日がある
ウイルスが怖くて不在投句する
グローバル化感染阻止に四苦八苦
―ウイルスはヒトモノカネの
後を追う

季節感見せる野菜は威張ってる
太陽と水でいきいき夏野菜
―いまにみてごらん私のための時
曲がり角いくつ越えたか強い意志
歩く事増えて小さな四季を知る
成り行きに任せられずに先ず一步
―そこの角曲がり小さな旅に出る

美しい地球を壊す国のエゴ
国々が報復連鎖ままならぬ
これ以上進むな地球温暖化
―無理難題オレが正義と押し通す

物忘れ今日は何度と指を折る
―一つ知り一つ忘れた古希の朝
じゃあ又ね言えずに続く長電話
―またあそぼ古希を過ぎてても
まだ言える

花は咲き約束通りやがて散る
―花は舞い舞って恵みの地に還る
ダルマさん僕の歩みをけしかける
煽られて踊ってつかむ男の座
―肩書きが人をつくると
いうまこと
再会を待たずに伸びる露の臺
―また会おう会える限りは
また会おう

廃校におもいを寄せて友集う
初恋の彼も手紙もセピア色
ぞくぞくする恋もしなけりや
終われない
なで地蔵両手でそっと包み込む
白い歯を忘れぬ母の生き上手
昔馴染みの飲み屋の電話みな不通
聞く側に徹して人が寄ってくる
怒るあなた笑うあなたの側が好き

慰霊の日忘れてならぬ永遠に
廃校の石碑に残る友の声
嫌味な人なぜか惹かれるいい笑顔
―人を恋い想う心の五七五

豊後梅ある夜飛び散り星となる
―川柳の星と輝く豊後梅
―寄せられた一句一句に乾杯を

俳句

土田 裕

聖五月花は草より木に移り
母の日の宅配便は妻に
ピアノ弾く音の軽やか窓若葉
老鷲の声の整ふ静寂かな
乙女らの二の腕眩し夏来たる

影山 武司

巻紙の答辞を畳み春の風
青空にひび入るるかに冴返る
簞え立つ土塁の空の初音かな
春の野へ迫り出す曲輪見張台
堀の面の桜を乱す權の波
花筏水の流れに逆らはず
宮城の闇に溶け込む桜かな
春風に翼乗せたる鶯かな
花房は土をあやせり藤の鉢
城址の碑眩し夏隣